

# 英語の変化と辞書記述

八木 克正

## はじめに

筆者は八木(2006)において、今現在使われている各種の英和辞典に見られる誤った記述や、極めて古い(多くはシェークスピア・欽定訳聖書の初期近代英語の時代や、Thomas Hardyなどの後期近代英語などの)表現・語義・用例などが、そのまま特に((古))や((廃))などの記号を与えることもなく残され、あたかも今の時代でもごく普通に使われるかのような記述になっている状況を、数多くの例をあげて具体的に明らかにした。本稿は、上記の八木(2006)の延長としての研究成果をまとめたものである<sup>1)</sup>。このような問題はいわば無限にあるのだが、ひとつひとつ検証することによって、別な研究者がその問題意識と調査方法を学び、幅広い研究になっていくことを願っている。

八木(2006)で述べたことをここで繰り返すことはできないが、方法論的な部分を簡単にまとめておく。そこで明らかにしたのは次のような事実である。

第一に、英和辞典の中には共通した数多くの問題が含まれており、その由来を尋ねれば、古い時代の英和辞典、特に1915年以降の種々の辞典にその源があること

---

1) 『ユース』や八木(2006)の内容は、かなりの部分がすでに英和辞典の最新の改訂に利用されてしまっている。特に、八木(2006)の記述内容の多くは、すでに小学館のホームページ「語法の鉄人」で公開したものである。従って、これらの盛られた内容そのものの新鮮味が薄れたのも事実である。出典もあげずにこれらの内容を利用することは、知的財産権上重大な問題であることは明言しておかねばならない。

エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

を明らかにした。その背景には、辞書編纂の常として、既存の辞書を参考にして、そのまま無反省に受け継いでしまう傾向があることを具体的に明らかにした。

第二に、英和辞典の諸問題のうち、今は使われないう古い英語は、その多くが COD 初版に由来し、また、COD 初版は、“Dictionary of Current English” としながらも、ほぼ OED の記述をそのまま引きついだものであることを明らかにした。

第三に、1910 年代以降、それまでの外国の辞書をそのまま翻訳するという時代を脱して、日本人のために必要な情報を記述する英和辞典が作られるようになり、編者の独自の英語の観察にもとづく記述がなされた結果、そこに少なからぬ誤謬が含まれていることも明らかにした。

第四に、これらの古い英語や編者の誤謬を含んだこれらの辞書記述が、現在の英語学習文法にすくなからぬ影響を与えている事実も明らかにした。

筆者のこのようなひとつひとつの問題点の指摘と、現用 (current) であるかどうかの検証は意味があるかもしれないが、その問題の記述の根源をたどる作業は無駄なように受け取る向きもある。しかし筆者としては、このような問題点の指摘とその実証的な検証ばかりでなく、問題点の根源をたどる作業も含めて、英和辞典の問題点に関するこのような研究を日本における英語辞書学の分野のひとつとして確立してゆきたいと思う。

このような作業をするためには、まずは現在の英和辞典の諸問題を自ら発見する目を養う必要がある。その問題意識の正確さを確認するために、パイロットスタディー風の小規模なインフォーマント調査によって、それが確かに問題であることを確認しなければならない。この場合、必ず、現在市販されている種々の英和辞典に共通した問題であることを丹念に調べて確認することが肝要である。筆者が考えている研究というのは、特定の辞書だけの誤植や誤記、認識の誤りなどは問題にしていなからである。

次に続く作業は、二つの方向をとる。ひとつは、その語義・用法が現代英語として使われるかどうかの検証である。さまざまな現代英語の辞書や文法書、語法書などによって問題になる用法を検証する。この検証には、現代の英文法書ばかりで

なく、19世紀末以来の Sweet, Jespersen, Poutsma, Kruisinga, Curme などの文法書などの検証も欠かすことができない。コーパスなどによって検証することも必要である。最終的には、どうしてもインフォーマント調査が必要な場合が多い。現代英語のコーパスは必ずしも現代英語だけを含んでいるだけでなく、文章中に引用された聖書や、古い文学作品の retold ものが入っている場合がある。そのような retold ものは原作の英語に引きずられて、古い英語を使っている場合が少なくない。そのような問題克服のためにも、インフォーマント調査が必要になる。しかし、インフォーマント調査の結果は、必ずしも統一した結果が出るとは限らない。人によって言語経験が異なるために感じ方が違う可能性があることと、言語変化の中間段階では、特定の表現を認める人と認めない人が現れることが避けられないからである。

二つ目の検証は、問題の語義・用法の由来をさぐることである。この検証は、ある意味では趣味のような側面があるが、探求する楽しさもある。種々の問題の由来の数多くは、斎藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』（本稿では『熟語本位』と言及する）、『研究社英和大辞典』初版、『三省堂クラウン熟語辞典』、『岩波中辞典』などにたどりつくことが多い。ここから更に、COD から OED, Webster の諸辞書、Dwight Whitney の *The New Century Dictionary* などに遡ることも少なくない。後で述べるが、その他にも、OALD の初版にあたる ISED やその改訂版にあたる ALD, OALD<sup>5</sup> 版あたりまで残っていた古い表現にもその根源を見ることができる。

二つ目の検証は、明治以降の内外のあらゆる辞書を揃えていなければならない。その点では、筆者の探求にも限りがあり、結局は調べのつかないものも出てきている。このようなものは、いつかの時代に英和辞典の編者が独自の考え方を記録したのかもしれない。ひとつ目の探求の方がもっとも重要であり、二つ目のような検証は必ずしも必要ではない。

では、残りの紙幅で許される限り、八木 (2006) では扱うことができなかった具体的な問題をいくつかとりあげてみよう。

## 1. 動詞 *gain* の構文

英和辞典の中には、*gain* の他動詞の項に (1) のような書き換えを記述したものがあ

- (1) a. He *gains* many friends through his honesty.  
 b. His honesty *gains* him many friends.  
 c. His honesty *gains* friends for him.

*gain* という動詞は、英和辞典の記述でも誤りが多い典型的な語で、筆者もいろいろと論じた (八木 (1996: 122ff.))。それはさておき、(1) の3例は実際に使われる可能性があるだろうか。まず、ささやかであるが5人のインフォーマント (イギリス人3人、アメリカ人1人、カナダ人1人) 調査の結果をみておく<sup>2)</sup>。5人とも一致して、(1b) が使われる可能性が一番高く、(1c) が使われる可能性が一番低いという。(1a) はとても堅苦しい書き言葉では可能性がないわけではない、といった反応である。ただし、これら3つとも使われる可能性を判断しただけであって、自分が実際に使うことはないと言っていることも付け加えておかねばならない。

英米の学習英英辞書があげる *gain* の「...を手に入れる」の意味では、どれをみても人を目的語にとった用法はなく、極めて限られた抽象名詞をとる用法があげられている。MED の用例を (2) にあげておく。

- (2) a. Bolivia *gained independence* from Spain in 1825.  
 (ボリビアは1825年にスペインから独立した)  
 b. In her final exam she *gained a B grade*.  
 (彼女は最終試験でB評価を得た)  
 c. He *gained entry* to the building by showing a fake pass.  
 (彼は偽造パスを見せてそのビルに入り込んだ)  
 d. Her theory only recently *gained acceptance*.  
 (彼女の理論はごく最近になって受け入れられた)

2) インフォーマント調査には、長崎外国語大学の井上亜依講師の協力を得た。

e. She hopes to *gain experience* by working abroad for a year.

(彼女は1年間海外で仕事をして経験をつみたいと思っている)

最近の英英辞典では、どれをとっても (2) とほぼ同じような用例が使われている。

OED (sv. GAIN v<sup>2</sup> 6a) をみると、“To bring over to one's own interest or views, to persuade (often in bad sense, to bribe) ; also to *gain over*.” (自分自身の関心・見解を押し付ける、説得する (しばしば悪い意味で、買収する) ; また *gain over* の形で) の語義があり、(3) のような例がある。

(3) a. He did not try to *gain* him over by smooth representations. (1834)

(彼は弁舌さわやかに彼を見方に引き入れようとはしなかった)

b. It is much easier to lose friends than to *gain* opponents. (1878)

(敵を作るより味方を失う方がよほどたやすい)

OED のこの記述を受けてか、斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』(1915) には、「(信用、人望、友人などを) 得る」があるが、用例で人を目的語にとっているのは “*gain over a man* 人を語らふ (引入れる、抱き込む)” がある。また、RHD<sup>2</sup> にも OED と同じ語義があり、*gain supporters* の例がある。

Web.<sup>3</sup> (sv. GAIN v. 1e ) には OED とはやや違った次のような語義がある： to make or acquire (as a friend) <*gain an acquaintance*> ((友達などを) 作る、得る<知人を得る>)。これを受けてか、MWCD<sup>11</sup> に “to establish a specific relationship with <~ a friend>” (... と特別の関係を作り上げる<友人を作る>) の語義と用例がある。

(1) にあげた諸例がどこから来たのか断言はできないが、OED, 『熟語本位英和中辞典』、Web.<sup>3</sup>, RHD<sup>2</sup>, MWCD<sup>11</sup> などにその出典の可能性があると考えることができる。他の辞書の記述などを考え合わせると、『熟語本位』のあげる語義はいずれも今は古くなっていると考えてよい。

(1) の3つの文では、(1b) が *gain* のもっとも普通にありえる構文であり、*gain A B* の形は可能であるが、*gain B for A* の形は意味の理解はできるが、実際に使われる可能性はないように思われる。

エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

結論としては、(1) の3つのいずれも人を目的語にとっているが、今の英語ではその可能性は極めて低いが、しいて選ぶとすれば (1b) の形ということになる。

## 2 have a game with him は「彼をだます」の意味になるか？

英和辞典の多くは、game の項に「計画、計略、意図、うまい手」の語義をあげており、それに対応して、「have a game with him 彼をだます」のような例がある。しかし、以下に述べるようにこの成句は実際には今は使わない、古い表現のようである。

英米加の5人のインフォーマントは誰一人としてこの使い方を知っている人はなかった。成句として play games with ... があるが、これは「からかう」の意味で、「だます」ではない。

この成句はどこからきたのか、手元のあらゆる辞書類を探してみた結果、Henry Cecil Wyld, *The Universal Dictionary of the English Language* (筆者の手元にあるのは、Eric Partridge の補遺が加えられた1961年の第14刷。以下UED) に、類似の記述があることがわかった。そのUEDのGAME (I), n. 第6義を以下に引用する：Jest, joke, fun; opposed to *earnest*: *to speak in game*, Phrs. *To make game of*, *ridicule*, *laugh at*; *to have a game with*, *to hoodwink*, *befool*. (戯れ、ジョーク、おかしさ；*earnest* の反対：*to speak in game* 冗談を言う，成句 *to make game of* 嘲る、笑いものにする；*to have a game with* だます、馬鹿にする)

UED は、実は、A. S. Horny の ISED, ALD, OALD の一連の辞書の記述にいろいろな影響を与えている。have a game with はそのひとつの例である。ISED には次の記述がある：GAME n. 5 a jest or a joke; something done in fun; a dodge or a trick. *None of your little games* (i.e. don't try to play trick on me) ! *You're having a game with me* (i.e. trying to deceive me, make me look silly, etc.) (戯れまたはジョーク；楽しみで行われたこと；ごまかし、計略。

その手には乗らんぞ。お前の計略にのるものか) ALD, OALD<sup>3</sup> は同じ定義と用例があるが、OALD<sup>4</sup> からは省かれた。

おそらく ISED, ALD, OALD<sup>3</sup> のいずれかの記述を受け継いで、『三省堂クラウン英語熟語辞典』(1965) の “have a game with ... を馬鹿にする；だます；に馬鹿を見させる：You are having a game with me. あなたは私をだまそうとしている” の記述ができたのであろう。

これがいろいろな経緯を経て、今の英和辞典に残っているものと思われる。現代英語を扱った辞書としてはこのような成句は削除するか、((今は古)) などのラベルを付した方がよい。

八木 (2006. 第5章) では、英和辞典には今は使われない古い成句が数多く残されていることを指摘した。過去の英和辞典にあげられている成句が今も普通に使われるかどうかの検証は、面倒な手続きではあるが、辞書編纂者の義務である。

### 3 be incidental on/ upon... という collocation

incidental は普通は to を伴って、「... に付随した」の意味になることはどの辞書にも書いてある。しかし、英和辞典の中には、英米の学習辞典にはない be incidental on, upon... で「... に付帯的な、二次的な」(『研究社新英和大辞典』第六版, 2002) の意味をあげるものがある。

『ランダムハウス英和大辞典』(第二版, 1994) にはこの語義はないが、成句として「incidental on [or upon] ... に付随する」をあげ、(1) の用例をあげている。

- (1) the discomfort *incidental upon* an overindulgence of alcohol 深酒の後の不快さ。

この collocation は『新編英和活用大辞典』(市川繁治郎 (編集代表), 1995) や、BBI<sup>1,2</sup> などの辞書にもない。また、Web.<sup>3</sup> を含めて、AHD<sup>4</sup>, WNWCD<sup>4</sup>, MWCD<sup>11</sup> には、「付随的な」の語義はあるが、incidental on [upon] の collocation はない。

BNC, Word BanksOnline のいずれにも incidental on [upon] の用例はない。

エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

筆者が手に入れることができた incidental on [upon] の例の中からいくつかあげておく。いずれも「...に付随した、...につきものの」の意味であり、「付帯的（二次的）な」の意味ではない。

- (2) The foregoing rules and facts, on the other hand, appear to me clearly to indicate that the sterility, both of first crosses and of hybrids, is simply *incidental or dependent on* unknown differences in their reproductive systems; the differences being of so peculiar and limited a nature, that, in reciprocal crosses between the same two species, the male sexual element of the one will often freely act on the female sexual element of the other, but not in a reversed direction. It will be advisable to explain a little more fully, by an example, what I mean by sterility being *incidental on* other differences, and not a specially endowed quality.... [Charles Darwin, *The Origin of Species*. Chapter IX]

(他方で、先に述べた法則や事実は、明らかに次のことを示していると思われる：第一次交配種と異種交配のいずれにも生じる不妊は、単にそれらの再生産システムにおける未解明の相違に伴うか依存するかに過ぎない；その相違は非常に特異で限定されたものであるために、同じ二種間の相互交配においては、一方のオスの性的要素が他方のメスの性的要素に自由に働きかけることが多いが、その逆にはならない。不妊が別な相違に付随するものであり、特に賦与された性質のものではないということの意味を、例をあげてもう少し十分に説明することが望ましいであろう)

次のニューヨーク・タイムズの例も同様に、「...につきものの」の意味である。

- (3) GAME shows are a television perennial, hanging in there no matter how tastes change, and at the moment dominating the programming on weekday mornings. Between 9 A.M. and 12:30 P.M. there are now 12 game shows, most of them based on the principle that it is better



to have the good things of life than to be without them. Money, in fact, is almost *incidental on* most game shows; it is a trash compactor, say, or microwave oven that counts.

[*New York Times*, May 17, 1983. "TV: GAME SHOWS AND THE GOOD THINGS IN LIFE," by John Corry]

(ゲーム番組はテレビにつきものである。好みの変化にかかわらずテレビに登場する。現在のところ平日の午前中の番組を独占中である。午前9時から午後12:30までの間に、今のところゲーム番組が12あり、そのほとんどは人生に役に立つものは持っていないよりは持っていた方がいいという原則に基づいている。つまり、お金がほとんどのゲーム番組に付き物で、例えばゴミ圧縮機とか電子レンジに人気がある)

英国議会のホームページ (<http://www.parliament.uk/>) の英国議会文書には、consequential and incidental という表現が頻出する。いずれも「付随した」の意味である。以下は、2002年11月6日の上院の文書。

- (4) I stress that the power is wholly consequential and incidental. It is about tidying up. It would not allow the Government to make provision which was not purely consequential or *incidental on* something already in the Bill. Yesterday, Mr Oliver Letwin stated: .... (その権力は論理的必然であり、付随的なものであることを強調しておく。それは整理整頓に関わる問題である。それは法案にすでに存在しているものからの論理的必然でもなく付随的でもない条項を作ることを政府に許すものではない)

Googleによって各種のデータを見ると、*incidental upon* はかなり古い文献に見出すことができる。いくつか例をあげておく。

- (5) When the Legislature of 1883 elected Gov. Cullom to the United States Senate, Lieut. Gov. Hamilton succeeded him, under the Constitution, taking the oath of office Feb. 6, 1883. He bravely met

エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

all the annoyances and embarrassments *incidental upon* taking up another's administration.

["John Marshall Hamilton, 1883 - 1885" in *Governors of Illinois*  
Source: *Portrait and Biographical Album of DeKalb County, Illinois*  
Published by Chapman Brothers, Chicago. 1885]

(1883年に州議会がカロム知事を合衆国上院議員に選出したとき、憲法に基づき、ハミルトン副知事が知事の職を継ぎ、1883年2月6日に就任の宣誓をした。彼は他人の政府を引き継ぐことに伴うあらゆる悩みと困惑に立ち向かった [1885年の文書による記事])

- (6) Added to this are the cares *incidental upon* transporting, receiving, and distributing fresh instalments of children, as often as circumstances require.

["A Day With Dr. Brooks" by Mary E. Dodge. December, 1870 issue of *Scribner's Magazine*]

(さらにこの仕事に、必要なだけ頻繁に子供たちの新たな補給を輸送し、受け入れ、配分する仕事に伴う世話が加わった [1870年発行の雑誌からの引用])

では、いくつかの英和辞典にある *incidental on* [upon] の「付帯的な、二次的な」の意味はどこから来たのだろうか。OED<sup>2</sup> (sv. INCIDENTAL 2) には次のような定義と (7) としてあげた用例がある: *incidental to*: liable to happen to; to which a thing is liable or exposed. *incidental upon*: following upon as an incident. (*incidental to* の形で、... に対して起こりそうで; ある事柄が付随しがちで、現れそうで。 *incidental upon* の形で、出来事が付随して起こりがちで)

- (7) Others ... may contend that ... with the rightly constituted or moral man, correct conduct to others is merely *incidental upon* the fulfilment of his own nature. (1851)

(人格高潔な人とか道徳的な人にとっては、他人に対する正しい行いは、

単にその人の人格の完成に伴って行われる行為にすぎないと主張する人達もいる)

しかしこの記述は COD 初版には引き継がれず, そのためか『熟語本位』にもない語義である。『研究社新英和大』(初版) (1927) にもない。しかし、『三省堂英和大』(1928) には OED から引き継いだと思われる次の記述がある:

(8) 二 付随の, 附帯の (upon)

おそらくこの記述に影響を受けたのであろうが、『研究社新英和大』(第二版) (1936) には OED を参考にしたと思われる (9) の記述が加わった。

(9) 1 2) 主要でない, 枝葉的な (=unessential) [remarks], 偶然伴ふ, 偶発の (=casual) [(up)on]

『研究社新英和大』(第六版) (2002) では、

(10) 1b [...に] 付帯 [二次] 的な (on)

となって残っている。このような記述が今の英和辞典にまで引き継がれたものであろう。

## 結語

本稿では、八木 (2006) を補足する若干の英和辞典が抱える問題を取り上げて論じた。恐らくこのような問題は、根本的に英和辞典を見直すことがない限り、簡単にはなくならないと考えてよい。ここ最近に出た英和辞典の改訂は、いろいろな研究を参考にしたのであろうが、かなりの修正が加えられている。しかし、本質的には他人の研究を引き写したものであって、辞書編纂者が本格的に取り組んで新たな問題を解決しているとは言いがたい面が少なくない。英和辞典の古い時代との決別はまだまだこれから、本格的で組織的な研究なくしては不可能である。

## エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

## コーパス

BNC: The British National Corpus. 小学館が提供する CQS を利用。

WordBanks *Online*. 小学館が提供する CQS を利用。

## 引用辞書の略号

AHD<sup>4</sup>: *American Heritage Dictionary*, 4th ed. 2000. Boston: Houghton Mifflin.

ALD: *Advanced English Dictionary*. 1963. 東京: 開拓社

BBI<sup>1,2</sup>: *The BBI Combinatory Dictionary of English*, 1st ed. 1986, 2nd ed. 1997.  
Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

COD: *The Concise Oxford Dictionary of Current English*. Oxford: Oxford University Press. 初版 1911, 第 10 版 1999, 第 11 版 2004.

ISED: *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*. 1942. 東京: 開拓社

LDCE<sup>4</sup>: *Longman Dictionary of Contemporary English*, 4th ed. 2003. 東京: 桐原書店.

MWCD<sup>11</sup>: *Merriam Webster's Collegiate Dictionary*, 11th ed. 2003. Springfield, Mass.: Merriam Webster.

OALD<sup>3,4,5,6,7</sup>: *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 1974, 1989, 1995, 2000, 2005. Oxford: Oxford University Press.

OED: *The Oxford English Dictionary on Historical Principles*. Oxford: Oxford University Press. 1857-1928.

OED<sup>2</sup>: *The Oxford English Dictionary on Historical Principles on CD-ROM*. 1992. Oxford: Oxford University Press.

Web.2,3: *Webster's Second New International Dictionary of the English Language*, 1934; *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*, 1961. Springfield, Mass.: Merriam Webster.

WNWD<sup>4</sup>: *Webster's New World Dictionary of American English*, 4th College ed. 2000. Prentice Hall.

『ユース』: 『ユースプログレッシブ英和辞典』(八木克正(編集主幹)) 2004. 東京: 小学館.

## 引用文献

八木克正. 1996. 『ネイティブの直観にせまる語法研究—現代英語への記述的アプローチ』  
東京: 研究社出版.

八木克正. 2006. 『英和辞典の研究—英語認識の改善のために』 東京: 開拓社.

八木克正. 2007. 「現代英語の新しい成句と構文」『言語と文化』第 10 号 (関西学院大学言語教育研究センター)